



## 【m-HANDS 2020 第1回の報告】

中国ブロックでの指導医養成の報告

出雲家庭医療学センター大曲診療所 藤原和成

広島大学病院 総合内科・総合診療科 小林知貴

岡山家庭医療センター奈義ファミリークリニック 松下明

## 【m-HANDS-FDF】

(modified - Home and Away Nine DayS - Faculty Development Fellowship)

6年間にわたって継続してきた中国ブロックの指導医養成コースです。今年度もオンライン開催となりました。8月から3月まで、月に1回全8回のコースとして実施しています。

今年度も、JPCA-MLなどで募集して中国地方の指導医4名が参加中です。4名にはチームとして様々な課題に取り組んでもらっています。

以下に第1回に参加してくれた指導医からの報告の一部を掲載します。

2022年度も引き続き開催を予定しています、ご興味のある方はぜひご連絡下さい。

### 〈目的〉

中国ブロックの指導医の養成とプログラム運営の質向上を通して、プライマリ・ケアの普及と発展をめざす

### 〈対象〉

- ・中国ブロックに所属しており、家庭医療後期研修を修了した医師
- ・中国ブロックの家庭医療後期研修に関わる指導医

### 〈アウトカム〉

Core Competence : Adult Educator(成人学習支援者)

学習者と向き合い、その学びに気を配り、学びの場をサポートできる

教育者の役割と限界を知り、学習者と協同的に学び、生涯学習者を育てる姿勢で関わる

学習者の学びを促進するための理論と技術を適切に用いることができる 参加者と講師による学習共同体の形成を勧め、ブロック内の指導医ネットワークを作る

机上のプログラム作成だけでなく、各現場での仕組みづくりや教育チーム形成ができる

総合診療の魅力やプログラムの魅力を効果的に伝えられる発信力や求心力を発揮できる

ツールの活用や工夫などで独創的で質の高い遠隔教育ができる

第1回 オンライン開催 2021年8月28日

## 【青年の主張 2021】

フェローは当日参加のメンバーに対して「医学や仕事以外」の内容について説得、共感、賛同を得ることにより何らかの具体的な行動を引き起こすことを目的として3分間のプレゼンテーションを行いました。その後グループワークでは、プレ

ゼンの「成功」や「上手くいった」とは何か、メンバーのプレゼンを見て気付いたことは、オンラインでのプレゼンテーションの難しい点をテーマにディスカッションを行いました。話の中では少しでも記憶に残ることが必要でそのためには興味を持ってもらうための画像やジェスチャーへの工夫が大切、オンライン特有の距離感の難しさがあるなどの意見が出ました。次回の課題ではさらに短い30秒でのプレゼンを行う予定です。(高仁 佑)

#### 【FD 概論とエンプロイアビリティ】

FDの歴史的な流れと、FDの必要性について学ぶことが出来ました。FacultyをDevelopしていくこと自体も、目標によっては困難であると感じる一方で、MillerのピラミッドモデルやKirkpatrickのピラミッドを意識して学習評価を行うことで効果的な医学教育が出来るようになることを学びました。Employability、Employmentabilityについては実際技術を学んでいく側として、また提供していく側として何が出来るのかといったことを考えるきっかけになるとともに、単純に知識のなかった技術・言葉について知ることが出来たことが興味深く、Employabilityのもとと高い医師(免許)という職種の中でどのように家庭医を養成していくかについて改めて考えさせられる機会になりました。(大村大輔)

#### 【ファシリテーション】

ファシリテーションのスキルは、4つのスキル(プロセス)に細分化できることを学びました。

私は、漠然と「発散」と「収束」というワードは耳にしていたことがありますが、スムーズに発散するための場のデザインや、収束の結果、最終的に参加者が納得した上で結論に至るための合意形成のプロセスも重要であることが意識できました。

今回のNASAゲームで、私達のチームは各々の意見を述べ、闊達な議論をした上で、全員が納得のいく形で時間内に結論をまとめることができました。しかし振り返ってみると、今回はあくまでゲームであり、我々の医療に関する信念や、誰かの死生観が関わるような場面では、そう簡単には「全員が納得のいく結論」に辿り着かないように感じました。意見がコンフリクトした際のマネジメントは、まだまだ勉強していきたいです。(藤岡 淳)

#### 【フィードバックと5 micro skills】

事前に用意していただいたシナリオを用いて、効果的なフィードバックや5 micro skillsを意識したロールプレイを行いました。ロールプレイは、指導医役はもちろん、研修医役と観察者役も担当することで、学習者の心情や伝え方への配慮を感じ取ることができ、とても実践的でした。普段からの人間関係や定期的にフィードバックを行う仕組みなどの環境づくりが効果的なフィードバックにつながることを学べる良い機会でした。「Ask Tell Ask」法を意識して学習者の自己評価を尋ねたり、「3つのレベル(人間ビデオカメラ・Iメッセージ・予測される事態)」を意図して使い分け、徐々に深くなるフィードバックを今後も心がけたいです。(吉田 晶代)